

知識探訪

多民族社会の横顔を読む

マレーシア語とインドネシア語

言語に見る植民地支配の歴史

井口由布 (立命館アジア太平洋大学アジア太平洋学部准教授)

マレーシア語とインドネシア語は「よく似ている」、「だいたい通じる」などと言われている。とはいえ、どのあたりが同じでどのあたりが違い、どのような経緯で別々の言語として形成されることになったのだろうか。

わたしは学部時代、東京外国語大学のインドネシア・マレーシア語学科のマレーシア語専攻に所属していた。当時は、マレーシア語専攻学生も 2 年生になるとインドネシア語の文献を読む授業が必修だった。マレーシア語もインドネシア語もそれほど変わらないと教えられていたが、いざ文章を読むとわからない単語がたくさんあった。

最初につまずいたのは、「bisa」という単語。主語と動詞のあいだにはさまって、文章のあちらこちらに散見される。マレーシア語の辞書を見ると「毒」とある。なぜ「毒」などという意味の単語があちらこちらにあるのだろう。大変不思議に思ったのだが、インドネシア語の辞書の第一義は「～できる」。マレーシア語であるなら「boleh」を使うのだが、インドネシア語の「Bisa」は、英語で言うところの助動詞「can」のような働きをする言葉だった。

これまでの経験から考えると、マレーシア語とインドネシア語の違いは、書き言葉ではそれほど大きくないが、日常語ほど大きいようだ。インドネシア語の新聞は読めるのに、日常会話の方で苦労するという具合である。どうやらこのことは、二つの言葉が別々の国語として整備されてきた歴史に関係しているようだ。

マレーシア語もインドネシア語も、スマトラ島やマレー半島の沿岸部で古くから使用されていたマレー語を起源としている。植民地時代以前、このマレー語は、現在のマレーシア、インドネシア、フィリピン、タイの南部を含む地域における交易のための国際語として港湾地域を中心に使われていたという。ところが 19 世紀、現在のマレーシアに相当する地域は英国に、インドネシアはオランダに植民地支配され、別々の宗主国のもとでマレー語に関する政策も別々に行われた。

例えば単語の綴り方。どちらの地域でもアラビア文

字による表記ではなくローマ字による表記が推進されたが、英国領マラヤでは英語風の綴りが、インドネシアではオランダ風の綴りが採用された。また、それぞれの地域に独特の語彙や表現が固定化されていった。インドネシアではジャワ語起源の単語が多くとり入れられて定着した。外来語もマラヤでは英語起源、インドネシアではオランダ語起源の外来語が多く取り入れられた。

第二次世界大戦後、マレーシアは英国が支配した領域を、インドネシアはオランダが支配した植民地を基本的に受け継ぐ形で独立した。どちらの国においてもマレー語を起源としたマレーシア語とインドネシア語を国語として採用した。植民地時代に起きたように、マレーシア語とインドネシア語は、別々の政策のもとでそれぞれの国語として語彙、文法、発音、つづりなどが整備され、別々に展開していった。

他方で、マレーシア語とインドネシア語を統合しようという動きもあった。そもそも二つの地域の知識人たちのあいだには交流がずっとあり、お互いに大きな影響を受けていた。1970 年代には綴りをはじめとしたマレーシア語とインドネシア語の統合が図られたという。

最近、私はインドネシア語にも触れることが多くなってきたが、とっさのときには最初に学んだマレーシア語がでてくる。やはり「Malaysia Boleh!」(「マレーシアならできる」という意味)であって、「bisa」ではありえないのだ。

< 筆者紹介 >

1971 年、東京都生まれ。東京外国語大学大学院地域文化研究科博士後期課程修了。博士 (学術)。コーネル大学大学院、マラヤ大学大学院留学。現在は立命館アジア太平洋大学アジア太平洋学部准教授。専門は、マレーシア思想史。マレーシアにおける国民的アイデンティティの形成について研究。論文「マレーシアにおける社会科学の形成と展開」、「大学建設に見る植民地主義的知の制度化」、「Formation of Social Sciences in Malaysia」など。日本マレーシア学会 (JAMS) 運営委員。